

静岡文化芸術大学図書館・情報センターだより

# 温故知新

Shizuoka University of Art and Culture Library News

2010.7 Vol.16

平成22年7月発行

発行所 静岡文化芸術大学 図書館・情報センター  
〒430-8533 浜松市中区中央二丁目1番1号  
TEL (053)457-6124 FAX (053)457-6125  
<http://www.suac.ac.jp/library/>

## Contents

### ■表紙

『富嶽三十六景』 ①



### ■図書館散歩

回転ドアの  
向こうの自分 ②

静岡文化芸術大学 学長  
熊倉 功夫

私の愛読書 ③

図書館・情報センター長  
文化政策学部 文化政策学科 教授  
大学院 文化政策研究科 教授  
藤田 勝一

### ■特集

現代社会にストーリーテリングを— ④

Scottish Storytelling Centreを訪ねて  
文化政策学部 国際文化学科 教授  
美濃部 京子

### ■巻末

図書館ニュース ⑥

グラフで見る図書館・情報センターの10年

### 『富嶽三十六景』 葛飾北斎画

高橋誠一郎 監 『伝統芸能手摺木版北斎画 大錦富嶽三十六景』 山田書院

『富嶽三十六景』の作者である葛飾北斎は、江戸時代化政文化を代表する浮世絵師の一人であり、宝暦十年(1760年)九月二十三日に江戸本所割下水(現在の東京都墨田区亀沢あたり)で生まれた。したがって、2010年の今年はちょうど生誕250年になる。

『富嶽三十六景』は葛飾北斎の晩年(71歳ごろ)の作品であり、江戸時代の浮世絵風景画の代表作のひとつである。江戸中期以来の透視図法(遠近法)が活用されていること、当時流行していた染料である「ペロ藍」ことブルシャンブルーを用いて摺られていること、表題が「三十六景」となっているにもかかわらず四十六図であること、落款形式や書体が異なっているため四十六図が一度に制作されたのではなく数年の間に断続的に制作されていることなどの特色がある。

全枚数については、当初表題のように三十六枚での完結が予定されていたようであるが、天保二年の広告には「百にもあまるべし」となっているので、途中の段階で総数未定という時期があったようである。しかし、結果として十図が追加され、四十六図での完結となっている。

四十六図は、「凱風快晴」「山下白雨」など富士山そのものに正面から取り組んだものと、「江戸日本橋」「神奈川沖浪裏」「信州諏訪湖」「駿州片倉茶園ノ不二」「遠江山中」「尾州不二見原」など江戸日本橋から常陸(千葉県)・甲斐(山梨県)・武藏・相模(神奈川県)・駿河・遠江(静岡県)・信濃(長野県)・尾張(愛知県)まで広範囲にわたる場所から見える富士山を当時としては奇抜な構図で描いたものとがある。

北斎は、このあと絵本『富嶽百景』を制作している。これらの作品は、歌川国芳や歌川広重(安藤広重)らのみならず、欧米の芸術に大きな影響を与えたとされ、ドビッシュの交響曲『海』は「神奈川沖浪裏」から曲想を得て作曲されたという逸話は有名である。

#### 【参考文献】

※永田生慈 著 『葛飾北斎』 吉川弘文館 2000.[712.8/N 13]

※大久保純一 著 『北斎の富嶽三十六景: 千変萬化に描く』 小学館 2005.[721.8/O 54]

※月本寿彦 編 『北斎の富士: 富嶽三十六景と富嶽百景: 生誕250年記念展』 アートワン 2010.[706.921/Ka 88]



静岡文化芸術大学 学長

熊倉 功夫

Kumakura Isao

### 本文中に登場した資料

林屋辰三郎(著)

『中世文化の基調』

210.4 / H48

芳賀幸四郎(著) ; 日本歴史学会(編)

『千利休』

280.8 / J 52 / 105

柳宗悦(著)

『朝鮮とその芸術』

750.8 / Y 52 / 6

加藤文太郎(著)

『単獨行』

786.1 / Ka86

Tennessee Williams(著) / 鳴海四郎(訳)

『テネシー・ウィリアムズ回想録』

932.7 / W 74

# 回転ドアの向こうの自分

私は、読書好きではありません。本は大好きですが、読むより見るのが好き。ある人にいわせると、私は背表紙マニアなのだそうです。一時期は本の装幀に凝って、何冊か自著の特装本を作ったりもしました。

というわけで誰にでも、ひとしなみに薦められる本というのは少ないので、自分の専門分野からあげてみましょう。最初は、大学に入って研究テーマを決めるこことなった『中世文化の基調』です。この本への思いは「文藝春秋、別冊」の「日本人は本が好き」という中に書いたことがあります、日本が敗戦から立ちあがって新しい文化を作ろうとする時代の熱気がこもった歴史書。まさに「ふりかえれば未来」というように、日本の未来を考えるのに、中世の民衆文化の伝統を発掘しています。

恩師芳賀幸四郎先生の『千利休』はなかなかの名著です。茶の湯文化を大成し、その後の日本文化に大きな影響を与えた千利休の伝記です。なぜ豊臣秀吉に殺されたのか、そのあたりに文化史家としての先生の魅力的な分析が光ります。

これも学生時代に出会って大きな影響を受けた本ですが、民芸運動の創始者である柳宗悦の『朝鮮とその芸術』もすばらしい本です。日本が韓国を併合して植民地としてから、日本人の中に韓国に対する差別意識が助長されました。1919年、京城で朝鮮独立運動がおこりますと、日本はその弾圧に向かいます。国をあげて朝鮮の独立運動を非難する中で、数少ない日本人がその擁護に立ちあがりました。その一人が、当時30歳だった柳宗悦です。その数年前、柳は朝鮮李朝の焼き物に出会いました。白磁に草花を染付で描いた小さな壺でした。それを一目みて、柳は朝鮮の芸術に開眼します。焼き物だけでなく、すべての文物の素晴しさに圧倒されました。それは芸術を生みだした朝鮮民族への尊敬の念となり、その独立運動を支持する柳の言動として表れたのです。

ここには、人間を固定観念で縛るのはイデオロギーであって、物はもっと柔軟に、ことの本質を人間に感得させる力がある、という原理が示されています。まさに「出会う、感じる、創造する」というプロセスが浮かびあがっているといえましょう。

学生時代、運動嫌いの私でしたが、山登りだけは比較的よく試みました。中でも強烈な思い出は、三年生の時に登った立山連峰の剣岳です。その時、読んだのが、加藤文太郎の『単獨行』でした。今も伝説的な名を残す登山家の記録です。まだ登山が貴族的な趣味であった昭和時代の初期。加藤文太郎は貧しい登山家でした。ですからどんな困難な登山でも、一人で敢行せざるを得なかった。昭和5年1月立山へ向かった時も一人でした。ところが途中で東京帝国大学の山岳部の一一行に出会います。こちらは超エリートの集団です。あとからついていった文太郎でしたが、いよいよ剣沢の小屋に泊って登頂をめざす段階で、同行を拒否され、一人淋しく下山します。悲劇はその直後におこりました。剣沢小屋を襲った雪崩は、帝大山岳部と案内人たち6名の命を一瞬のうちに呑みこんでしまいました。

文太郎は一人生き残った慚愧の念と底知れぬ孤独感の中で「一月の思出、剣沢のこと」という記録を書き残します。私はこの文章に込められた文太郎の孤独を知ることで、幾度も勇気をもらつたように思います。

孤独という点で、加藤文太郎とは全く別世界の、狂気の孤独の一書を最後に紹介します。『テネシー・ウィリアムズ回想録』は反道徳的という意味では一種の悪書です。私自身がショックを受けた本というだけで薦めるというのとはちょっと違います。芸能人や芸術家のハチャメチャな生活ぶりは、週刊誌などでのぞき見しますが、テネシー・ウィリアムズの狂気は度がはずれています。アルコール中毒、クスリ漬け、錯乱、狂態、奇行、性的乱交、そして孤独と恐怖、その中の大量の作品の執筆。私の日常とは全く正反対の世界がある、ということを知ると同時に、回転ドアの向こうで、全く見知らぬ自分が共感しているような不思議な印象を受けた本でした。回転ドアがクルリと回って、世界が反転した瞬間、未知の自分に出会う、そんな楽しみが時として読書にはあります。



図書館・情報センター長  
文化政策学部 文化政策学科 教授  
大学院 文化政策研究科 教授  
**藤田 憲一**  
Fujita Ken-ichi

### 本文中に登場した資料

|   |
|---|
| 小林秀雄(著)<br>『無常といふ事・モオツアルト』<br>(小林秀雄全集:第8巻)』<br>918.68 / Ko 12 / 8 |
| 池波正太郎(著)<br>『青春忘れもの』<br>913.6 / I 34                              |
| カール・マルクス(著)<br>『資本論』<br>331.6 / Ma 59-1                           |
| 内田義彦(著)<br>『社会認識の歩み』<br>081 / I 95 / 798                          |
| 内田義彦(著)<br>『資本論の世界』<br>081 / I 95 / 614                           |
| 木原武一(著)<br>『ぼくたちのマルクス』<br>309.3 / Ma 59                           |
| T.I.エマースン(著);小林直樹,横田耕一(訳)<br>『表現の自由』<br>(購入手続中)                   |
| 柳生直行(訳)<br>『新約聖書』<br>193.5 / Sh 69-1                              |
| 八木誠一(著)<br>『イエスと現代』<br>192.8 / Y 15                               |
| 三浦綾子(著)<br>『道ありき』<br>918.68 / Mi 671 / 3                          |
| 松本竜雄(著)<br>『初登攀行』<br>291.09 / Ma 81                               |
| 植村直己(著)<br>『青春を山に賭けて』<br>290.91 / U 42                            |

## 私の愛読書

人に本を薦めるのは難しいものです。「よい」本は読み手によって異なるし、さらに読むのにぴったりの時期というのもあって、万人向けの良書というのはありえないのではないかとさえ思われます。ただ、「ぼくはこんな本を読んできた」（立花隆の本のタイトル）というふうに、自分にとって有益だった本、愛読書などを紹介すれば、学生の皆さんに、そうした本への関心を持ってもらうことはできるかも知れません。

私が高校から浪人時代、大学生時代に読んだ本は、日本の古典文学作品が多い。これは、高校国語の教科書に載った小林秀雄の「無情という事」に触発されて、角川文庫の『無情といふ事』を買い入れたことがきっかけでした。小林の本に収載されていた、「平家物語」、「徒然草」、西行、実朝などに関する評論を読み、もとの古典にさかのぼって読むようになったのです。ちなみに、歴史学者の五味文彦さんも、小林のこの本を手掛かりに古典に入っていったということです（日本経済新聞2010.4.18コラム「半歩遅れの読書術」参照）。

助動詞などの文法事項をきちんと押さえて、古語辞典を英和辞典などに引き潰すころには、古典がだいぶ楽に読めるようになっていました。中でも「万葉集」などの歌集や、「土佐日記」「更級日記」「紫式部日記」などの日記文学が好きになりました。「更級」などは、全文書き写すほどでした。

江戸期の本も好きで、芭蕉、蕪村、西鶴、秋成のものなど、楽しんで読みました。また、本居宣長の「うひ山ぶみ」とか杉田玄白の「蘭学事始」といった学問の方法に関する本にも、刺激を受けました。

私の感受性の芯の部分は、こうした日本の古典を読む中で形成されたのではないかと思います。池波正太郎の『青春忘れもの』を読むと、彼は小学校を出るとすぐ株屋に勤め、かたわら岩波文庫の古事記、日本書紀からはじめて、日本の古典を読みあさったそうです。われわれのちょっと先輩の世代には、こういう人はたくさんいました。

大学に入ると、キャンパス内にある学生寮に入りました。学生運動が渦巻く中でも、旧制高校から続く教養主義の雰囲気がまだ残っていて、私も世界の文学書や哲学書などを人々に読んでみました。しかし、人格の深層まで届いたものはそう多くはありません。

その数少ないもののひとつに、マルクスの『資本論』があります。特に第1巻は熟読しました。これによって、社会を見る目ができたと思います。狭く経済学ばかりではなく、社会科学全般に共通する視座を与えてくれたのです。内田義彦の『社会認識の歩み』や『資本論の世界』を横に置きながら、取り組みました。内田の『歩み』は、大学院に進んでから自主ゼミで使ったことが思い出されます。後年読んだのですが、木原武一『ぼくたちのマルクス』は、マルクスの思想・学問へのよい道案内になると思われました。

自分の専門とする法学の領域では、T. I. エマースン『表現の自由』が、民主主義社会における表現の自由の機能を分析していく面白かった。表現の自由は、自己実現、真理への到達、政策決定への参加、社会における安定と変化の均衡維持、などの価値に仕えるというのです。この本はちょうど学生時代に出版されました。解釈論を支える根拠を理論的に述べたこの本に出会って、法律学も捨てたものではないと感じました。

また、若い頃にいろいろと悩む中で、『新約聖書』は折にふれて手に取った本です。愛とエゴイズムについて考察した八木誠一のいくつかの著作（たとえば『イエスと現代』）と照らし合わせるように読み、自分の生き方について考えました。クリスチャン作家の三浦綾子の本も、かなり読みました。『道ありき』には、彼女が若い日の苦悩と病から恢復して再生へと辿る道が述べられています。読みながら、私も前向きに生きなければ、と思ったものです。

自分が岩登りをするようになってから、クライマーたちの本をよく読むようになりました。谷川岳の岩壁を中心に登った松本竜雄の『初登攀行』には山仲間との友情が綴られ、登攀場面の表現には詩的な香りがあります。日本人でエベレストに初めて登った植村直己の『青春を山に賭けて』は、海外に飛び出して登山に打ち込む日々を生き生きと伝えてくれます。これらを青年期に読んでいたら、私もそちらの方面にもっと強く引き寄せられたかも知れません。



文化政策学部 国際文化学科 教授

美濃部 京子

Minobe Kyoko



ジョン・ノックス・ハウス



スコティッシュ・ストーリーテリング・センター



カフェの奥にストーリー・テリングのフロア



スコットランドの物語が描かれている壁

## 現代社会にストーリーテリングを Scottish Storytelling Centreを訪ねて

皆さんは「ストーリーテリング」という言葉はご存じでしょうか。日本ではもっぱら図書館における子ども向けのお話の語りをさして使われることが多いのですが、英語の「ストーリーテリング(storytelling)」はもっと広く伝承の語りも含めた物語の語りをさして使われます。「お話は、新聞や本、テレビ、ネット上など、私たちの周りのいたるところにあります。けれども、ストーリーテリングは、お話が人から人へ、生で、文字も機械も使わずに語られるときに生まれます。ストーリーテリングは人間に固有の技術であり、我々のもっとも古い芸術様式のひとつなのです」（スコティッシュ・ストーリーテリング・センターのパンフレットより）。私たち人間はおそらく太古の昔からお話を楽しんできました。現代でもかつてのような伝承の昔話の語り手は数少なくなったとはいえ、巷には都市伝説の類があふれていますし、修学旅行やサークルの合宿の夜などにみんなで集まって怖い話を語り合った経験のある方も多いのではないでしょうか。けれども、本当に優れた語り手のお話を聞く機会は日本ではなかなかありません。現代におけるストーリーテリングを様々な形で実践しているスコティッシュ・ストーリーテリング・センターを訪ねました。

スコティッシュ・ストーリーテリング・センターはエジンバラのオールドタウンの中心、エジンバラ城とホーリーロード宮殿を結ぶロイヤルマイルの中ほどジョン・ノックスの住居跡の一角にあります。1992年にスコティッシュ・ストーリーテリング・フォーラムというストーリーテラーたちの活動団体からスタートし、1997年に現在の場所に国内外のストーリーテリングの拠点であるセンターとして設立が始まりました。現在のような形で完成したのは2006年のことだそうです。

センターはその目的として①スコットランドの子どもたちに生のストーリーテリングを経験させること、②あらゆるコミュニティーのストーリーテラーを把握し、その活動を奨励し、語れるようにすること、③センターを国内外のストーリーテラーや物語の供給、保存をする場所として維持すること、④昔からの伝承や価値のあるものを新しい形で花開くようにすることという4つをあげています。そして、活動としては、国内外のストーリーテラーを登録し、必要に応じて派遣したり、センター内で子ども向け、一般向けの語りのイベントを開催するほか、ストーリーテラーを目指す人たちのための講習も行っています。また、ストーリーテラーたちの交流を図ったり、障害を持つ人やお年寄りのための語りや博物館や図書館での語りなどさまざまな形でのストーリーテリングの実践を行うプロジェクトを実施しています。

表の階段を上がってセンターの2階の入り口から入ると、受付のカウンターがあり、その向かいが売店になっていて、スコットランドの伝承や歴史などを扱った書籍やCDなどがたくさん置かれています。センター長のドナルド・スミス氏に内部を案内していただきながら、いろいろなお話を伺いました。まず、カウンターの奥はすぐカフェになっていて、大きな窓からロイヤルマイルを見下ろすことができます。人の出会いを大切にするという意味もあって、訪れた人が必ず通る入口のところにカフェを設けたのだそうです。このカフェの奥が板張りのフロアになっていて、主に子どもたちを対象にしたストーリーテリングのイベントに使われます。奥の壁にはいくつも窓があいていて、神話・伝説からはじまるスコットランドの物語が絵や人形などで表現されています。この壁は移動させて間仕切りとして使うこともでき、イベントに参加する子どもたちの人数によってフロアの広さを調整するのだそうです。奥の窓からは屋外にある語りの場所を見ることができます。芝生の上に円形の石の囲いを設けたその場所は屋内で聞くのとは違い、遠い昔に戻ったような雰囲気を与えてくれるに違いありません。



2階から3階にあがると、センターの事務室があり、そこではスコットランドだけでなくイギリス国内、また海外のストーリーテラーたちの団体の拠点としてそれを取りまとめる仕事をしています。センターにはスコットランドに住む100名を超えるプロのストーリーテラーが登録していて、希望に応じて派遣をしています。そのほとんどはいわゆる伝承の語り手ではなく、本などからお話を覚えて語る現代のストーリーテラーなのですが、スコットランドのトラベラー（ジプシーの一派）の語り手を中心に伝承の語り手も含まれているそうですし、登録している語り手の中にはエジンバラに住む日本人女性もいるということでした。

その奥には研修用の部屋があり、ストーリーテリングについて学びたい人、実践している人たちのための講習などが行われます。部屋の本棚には世界各地の昔話集などストーリーテリングの題材に使える本が多く納められています。またその奥の倉庫にはストーリーテリングに用いられる人形やペープサートなどの小道具のほか、前に日本の語り手の人たちが来たときに持つてこられたという紙芝居も置いてありました。

最後に1階に降りて行くと、およそ100名を収容できる階段式の客席を備えた劇場があります。劇場はストーリーテリングのイベントにふさわしく、マイクを使わなくても声が通るように工夫されているそうです。ステージの上には2007年に亡くなったスコットランドのトラベラーの優れた伝承の語り手ダンカン・ウィリアムソンの名前が刻まれた大きな椅子が置いてありました。ステージで語る語り手はここに座って話をするのだそうです。

ちょうど私がセンターを訪れた2008年夏には1週間にわたって「ダンカン・ウィリアムソン:ケイリーマン」と題して、ダンカン・ウィリアムソンを追悼する語りのイベントが開かれていました。ケイリー (Ceillidh) というのはゲール語で、スコットランドで行われるお話や歌などの出し物を楽しむパーティーのようなものですが、無尽蔵の昔話やバラッドのレパートリーを持ち、いくつもの楽器の演奏もしたというダンカンを呼ぶのにふさわしい名前と言えるでしょう。イベントにはダンカンの息子で語り手でもあるジミー・ウィリアムソンやスタンリー・ロバートソンなどのトラベラーの語り手のほかディビッド・キャンベルやタフィー・トーマスなどスコットランドやその他のイギリスの語り手が名を連ねていました。私が訪れた8月25日は「ナイト・オブ・ファイヤー」と題し、トラベラーの二人の女性ジェス・スマスとシーラ・スチュワートがステージに上がり、トラベラーの人々が旅の途中でテントでしたような実話に近い話がユーモアを交えて語られ、会場の笑いをさらったかと思うと、美しい声でのバラッドの歌があったり、大人が楽しめる90分のプログラムでした。中でも面白い話のときはセンター長のスマス氏の笑い声がひときわ大きく響いていて、自らお話を楽しんでおられるのがよく伝わってきました。

このように大人向けのイベントも開かれてはいるものの、ストーリーテリングというとまだまだ子どものためのものと考える人が多く、もっと大人が楽しめるものであることを知ってもらいたいということでした。また、センターでは現代にストーリーテリングを普及させることを目指しているけれど、伝統も大切にしていて、登録した語り手の中に伝承の優れた語り手がいた場合はエジンバラ大学のスコットランド研究所 (School of Scottish Studies) とも連絡を取り合って、学術的な調査も行い、反対に学術的な調査の中で優れた語り手がいれば、センターの方に紹介してもらうなど、学問的な部分と実践的な部分を協力・分担してお互いによい関係を維持しているそうです。

秋には海外からゲストストーリーテラーも招いて国際ストーリーテリング・フェスティバルが開かれていて、今年は21回目を迎えます。スコットランドにはなかなか行けませんので、日本でも身近にお話を楽しむ機会が増えることを願っています。



壁が動いて仕切りに



当日の催し物の案内



当日の2人の語り手 Jess Smith & Sheila Stewart



イベントのステージ

#### 参考文献

野村純一・佐藤涼子・江森隆子編  
『ストーリーテリング』  
弘文堂 1985。

Smith, Donald. *Storytelling Scotland: a Nation in Narrative*. Polygon, 2001.

Williamson, Duncan and Linda Williamson.  
*A Thorn in the King's Foot: Stories of the Scottish Travelling People*. Penguin Books, 1987.

Williamson, Duncan and Linda Williamson.  
*The King and the Lamp: Scottish Traveller Tale*. Canongate, 2000.

美濃部京子  
『スコットランドのトラベラーの昔話』  
『静岡県立大学短期大学部研究紀要』  
第9号(1998年)pp.25-33。

## 図書館ニュース

# グラフで見る図書館・情報センターの10年

### ◎ 蔵書冊数



### ◎ 受入冊数



### ◎ 入館者数



### ◎ 館外貸出冊数



静岡文化芸術大学創立10周年記念事業

## — ユニバーサルデザイン絵本コンクール2010 作品募集 —

—— すべての人が絵本を楽しめることをめざして、あなたの作品を待っています ——

2010年は「国民読書年」です。

また「静岡県子ども読書推進計画」の最終年でもあります。

そこでユニバーサルデザインを理念の一つとしている静岡文化芸術大学では、いろいろな立場の人が共に楽しむことのできる、

ユニバーサルデザインの考え方を取り込んだ絵本を募集します。

身体的、知的特性や年齢、文化などを超えて  
一緒に楽しむことのできる絵本を期待しています。

形、構成、素材などにとらわれることなく、  
自由な発想で絵本をつくってみてください。

なお、応募いただいた絵本は、多くの人に見ていただきたために、  
本学をはじめ県内施設で展示いたします。

応募締切:2010年9月30日(木)(当日消印有効)

応募方法:作品に以下のものを添えて、送付または直接持参してください。

■応募票A

■応募票B:作品表紙(もしくは作品の一部分)の写真L判またはA4判のカラーコピー、プリントアウト(デジタル絵本の場合)したものに貼付

■作品のテーマや考え方を説明した資料(A4判)

※応募要項は、以下のWebサイトからダウンロードできます。

<http://www.suac.ac.jp/10th/>

応募先/問い合わせ先:

〒430-8533 静岡県浜松市中区中央2-1-1

静岡文化芸術大学図書館・情報センター

「ユニバーサルデザイン絵本コンクール」係

TEL:053-457-6124 FAX:053-457-6125

E-Mail:toshio-t@suac.ac.jp